

## 27. $^{131}\text{I}$ -MIBG 陽性を示した腎腫瘍の一例

放射線医学

玉置幸久, 橋本禎介, 楫 靖,

内科学 (内分泌代謝)

松村美穂子, 門傳 剛, 笠井貴久男

泌尿器科学

釜井隆男, 吉田謙一郎

病理学 (形態)

本間浩一

【目的】腎原発 oncocytic carcinoid は極めて稀であり, 興味深い臨床経過を呈したため報告する。

【対象】症例は 71 歳, 男性. 15 年前から難治性高血圧があった. 血中 ACTH は 89.6 pg/ml と高値を認め,  $^{131}\text{I}$ -MIBG シンチで右上腹部に異常集積を認めた. しかし CT では副腎に異常はなく, 右腎に 85 mm×60 mm 大の腫瘍を認めた. 単純 CT では腫瘍内部はやや高濃度, 壁は低濃度で, 壁部分は不均一に造影されていた. Dynamic MRI では早期相から増強効果を認め, 後期相でも持続していた. 以上より病変は腎由来と考え, clear cell type の腎細胞癌の術前診断のもと手術が行われた.

【結果】病理学的には当初 oncocytoma と診断された. しかし術後血圧が正常化したことや MIBG シンチで陽性像を示していたことなど, 通常の oncocytoma として合致しない部分があることが議論され, 詳しい病理学的検査が追加された. 免疫染色では Chromogranin A 及び Synaptophysin が陽性であった. 電子顕微鏡による観察では膨化したミトコンドリアが見られ, 神経内分泌顆粒とみられる小顆粒を多数認めた. 以上より最終診断は oncocytic carcinoid と確定された.

【結論】難治性高血圧や内分泌学的異常を有する例や MIBG シンチで陽性像を呈する症例では HE 染色による観察で oncocytoma に典型的な所見であっても, oncocytic carcinoid の可能性を考えて免疫染色や電子顕微鏡検査などを追加することが有用と考えられた.

## 28. Adult onset idiopathic hypogonadotropic hypogonadism の 6 例

越谷病院 泌尿器科

小堀善友, 佐藤 両, 芦沢好夫, 八木 宏,

宋 成浩, 新井 学, 岡田 弘

正常の二次性徴の完了後に, 下垂体手術や放射線療法や外傷の既往がないにもかかわらず, 主として LH が低下し血中テストステロンが低下するために, 勃起障害・射精障害・男性不妊を来たす adult-onset idiopathic male hypogonadotropic hypogonadism (AIMHH) は 1997 年に初めて報告された疾患である. 本邦においては, AIMHH の報告はほとんどみられない.

我々は, 2006 年から 2008 年の 3 年間に, 6 例の AIMHH を経験したので, その臨床経過を報告する. 6 例中 3 例は第 2 子不妊を, 2 例は性機能障害を, 1 例は体毛が薄くなった事を主訴に来院した. 年齢の中央値は 41 歳 (33-47 歳), 血中ホルモンの中央値は LH 0.4 mIU/ml (0.3-0.9 mIU/ml), FSH 0.65 mIU/ml (0.4-0.9 mIU/ml), T49 ng/dl (15-87 ng/dl) であった. LH, FSH の日内変動を測定できた 2 例では, LH の律動分泌が消失していた. Gn-RH テスト, hCG テストの結果から, 視床下部性の精巣機能障害と診断され, 全症例で hCG と r-hFSH の自己皮下注が行われた. 精液検査の実施できた 6 例のうち 4 例で射出精液中に精子を確認できた.

AIMHH は, 男性不妊や ED の外来では当初報告されている程まれな疾患ではなく, ホルモン補充療法に良好に反応する疾患であると考えられた.